

ドイツ語学習における映画鑑賞の効果

吉 満 たか子

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

ドイツでは、授業への映画の導入をめぐる議論がメディア教育の一環として初等教育のレベルでも行われており、2008年にはフライブルク教育大学が、ドイツ語（国語）と芸術、音楽の3科目を横断する形で映画を取り入れたカリキュラムを作成している（Müller, 2012）。個人的な余暇活動として行われることが多い映画鑑賞を教育の一部として組み込むか否かは、議論の余地がある。しかし、例えばドイツ語授業はドイツ語だけを教える場ではない。ドイツ語を学ぶということには、ドイツ語圏の日常生活や政治、歴史、社会についても学び、自国の状況や学習者自身と比較し理解することも必然的に含まれるのである。これらの学びにとって、映画は大いに役立つメディアである。

広島大学外国語教育研究センターでは、2年次以降の学生がドイツ語を集中して学ぶプログラムとして、「ドイツ語特定プログラム」を提供している。本稿では、まず映画を授業に導入するメリットをドイツ語授業での可能性を考察する。その上で、このプログラムで実施している「ドイツ語映画 DVD 鑑賞マラソン」の実践とアンケート調査の結果を紹介すると共に、映画鑑賞がドイツ語学習にどのような影響を及ぼしているかを考える。

2. ドイツ語学習における映画鑑賞の効果

映画の持つ様々な特性は、見る者をその世界に引き込み、見る者の思考や感情に大きな影響を及ぼすことができる。ここでは先行研究から、映画が授業においてどのようなメリットを持っているのかを確認し、ドイツ語授業における映画導入の可能性について考察する。

2.1 先行研究に見る授業における映画導入のメリット

Schmidt (2015) は、映画教材を導入するメリットを次のように述べている。

Die Vorteile des Einsatzes filmischen Materials im Allgemeinen liegen oftmals in seiner leichteren Zugänglichkeit und Versehbarkeit, insofern Botschaften nicht artifiziell visuell-verbal übertragen werden (im Schriftbild) oder bloß auditiv-verbal (als Tonaufnahme), sondern mittels bewegter Bilder mit Tonspur in größeren Zusammenhängen und über mehrere Wahrnehmungskanäle.

映画教材を導入するメリットとして一般的によく挙げられるのは、意図的に視覚言語（画面に投影される文字）によってあるいは聴覚言語（録音された音声）だけで表現されている場合を除き、密接に関連した動画とサウンドトラックによって、メッセージが複数の知覚器官を使って受容されることで、他の教材に比べより容易に受け入れられ、そして理解されるということである。（吉満訳）

外国語授業で使用される教材を考えた場合、書かれたテキストは視覚言語から成り、音声教材は聴覚言語から成る。つまり、受容のチャンネルはそれぞれ視覚や聴覚に限定される。これに対して、動画とサウンドトラックから成る映画には、演者のジェスチャーや表情、ボディランゲージなど言語以外の情報も含まれる。また、メイクや衣装、小道具や大道具、セットなどの視覚情報や、効果音や音楽などの聴覚情報も映画には含まれている。加えて映画にはカメラワークや編集などの効果もあり、これらによって映画が発信するメッセージは受容されやすく、また理解されやすいというのである。また Schmidt は映画のメリットとして、映画には人を惹きつけるストーリーや緊張感をもたらす葛藤、そして感情移入ができる登場人物が存在し、それらが圧倒的な力を持っていることだとも述べている。

吉村 (2010) は日本語教育で映画を取り入れた授業実践の成果として、映画に登場するセリフや日本人の身振り・表情・心情・人間関係、日本の文化・社会、母国の言語・文化・社会に対して学習者が興味関心を示し、理解を深めたことを報告している。また、スペイン語授業における映画の導入を通じて浅野 (1999) は、「映画というハイ・コンテキストの教材は、文学作品を読むほどの実力がまだない初学者を対象とした場合、スペイン語の文化的背景を説くのに非常に有効であるばかりか、学生の語学に対する興味を持続させるのに一役買う有用なマテリアルと言える」と述べている。

Straßner (2013) は政治教育における映画の有用性について、政治教育における3つの原理を挙げて説明している。それは、「具現化の原則 (exemplarisches Prinzip)」、「対立性 (Kontroversität)」、「問題の特化 (Problemorientierung)」である。政治教育における「具現化の原則」とは、問題を具現化して理解しやすくすることである。「対立性」は、問題を多面的に捉えることを指す。「問題の特化」とは、ある問題についてその所在や由来を確認し分析することを指す。政治的なテーマの映画では、ある問題が具体的な場面や登場人物を伴って提示される (具現化)。通常、登場人物は複数であり、映画で取り上げられる問題がそれぞれの立場や視点から並行して描かれる。つまり、対立や矛盾が提示される (対立性)。また、映画では問題の由来や根源が説明され、クライマックスを迎えた物語は危機や急変へと展開する (問題の特化)。映画を用いた政治の授業では、映画の中で特化された問題について、その解決策を考えたり、映画の中で提示された解決策以外の方法を考えたりディスカッションすることができると Straßner は述べている。

いずれの研究からも、映画が異文化理解の促進や史実に対する知識の獲得や理解に有用であることが分かる。次項では、これらの有用性を踏まえ、ドイツ語授業での映画導入の可能性について考察する。

2.2 日本のドイツ語授業における映画導入の可能性

van Hoorn (2015) は、外国語としてのドイツ語 (Deutsch als Fremdsprache) において映画を取り入れることが、理論と実践の両面で進んでいないことを指摘し、その理由を歴史的に考察している。von Hoorn によれば、そもそもドイツにおける伝統的な Germanistik (ドイツ語・ドイツ文学研究、ドイツ語学、ゲルマン学) において、研究の中心は言語学、文学、そして中世研究 (Mediävistik) であり、これらの分野はドイツ語教員 (国語教員) 養成課程において必須とされているが、映画学 (Filmwissenschaft) はこの中に含まれず、マージナルなものとして扱われている。その根底には1910年代から始まる映画の芸術性をめぐる議論、そして第2次世界大戦中に第三帝国のプロパガンダに映画が利用されたことへの批判、文学作品の映画化をめぐる議論が流

れていると指摘している。

日本の Germanistik において、映画の研究が学問領域として認められているかどうかはさておき、「映画をドイツ語授業で教材として使用すること」についてはほとんど議論がなされていない。日本ではドイツ語が大学の初修外国語として学ばれており、通常は1週間に2コマ程度の授業時間しかない。また学習者も通常は初学者であり、映画の中に登場するドイツ語を理解することは、あいさつやごく簡単な表現を除きあまりにもハードルが高く、教材として映画を導入することの言語学習に対する効果が定かではないということがその理由として考えられる。しかし、だからと言って、ドイツ語授業にとって映画の利用価値がないという訳ではない。

初学者がドイツ語映画を鑑賞する場合、「日本語字幕を読む」という作業が必要となる。したがって映画から音声言語を直接的に受容するということは二の次になるし、そもそも限られた語彙と文法しか学んでいない初学者にとって、ドイツ語による言語情報の受容量はごく少ないものでしかない。それでも、学習した語彙やフレーズが映画に登場し、それが聞き取れた場合の喜びは動機づけの強化をもたらす。また、映画から受容される情報の量は、書かれたテキストや音声教材に比べ圧倒的に多いと言える。特に歴史や政治についての知識は、映画では理解されやすいように描かれている上に、登場人物への感情移入を伴うことで、より印象に残り、記憶されやすくなると考えられる。同様に日常生活についての知識も、作り込まれたセットの中での役者の演技を通じて具体的な形で見聞きすることで、文章を読んだり、教師が説明したりするよりもはるかに理解されやすく、かつ記憶されやすくなると考えられる。

3. ドイツ語映画 DVD 鑑賞マラソン

「ドイツ語特定プログラム」の受講者は、そのほとんどが1年次に週4コマの授業からなるインテンシヴ・コースを履修しており、それ以外の受講者も、原則として独検4級に合格しているか、それと同等のドイツ語能力が認められた学生である。受講者のドイツ語学習に対する動機づけは高く、2016年度にはクラス17名中10名が、夏休みにハンブルク大学で開催される1か月のサマー・スクールに参加した。

ドイツ語特定プログラムの受講期間は1年半である。2年次には週3コマの授業（ドイツ語母語話者教員による授業が1コマと日本人教員による授業が2コマ）を通年で受講し、3年次では母語話者による週2コマの授業を前期のみ受講する。「ドイツ語映画 DVD 鑑賞マラソン」は、この特定プログラムでの日本人教員が担当する2年次での授業で行っているプロジェクトである。ここでは、その実施方法を紹介し、受講者に対して行ったアンケート調査の結果を報告する。

3.1 DVD 鑑賞マラソンの実施方法

外国語教育研究センターでは日本語字幕付きのドイツ語映画 DVD を購入し、専用の書架ワゴンに入れ開架している。DVD の貸し出しは原則として1回につき2本まで、貸出期間は2週間としている。DVD は外国語教育研究センターの事務室で管理しており、事務室の開室時間内であれば自由に貸りることができる。受講者には少なくとも毎月1本の映画 DVD を鑑賞することを義務付けている。また、受講者にはあらかじめ「映画鑑賞の記録」(付録1)を配布し、毎月締め切りを設けて提出させている。鑑賞記録には、映画の原題と邦題、登場人物やストーリーを記録すると同時に、聞きとれたフレーズや映画の内容で理解できなかったこと、および映画の感想も記入する。また、自分なりの映画に対する評価を星の数で記入する。

3.2 受講者へのアンケート

受講者がDVDをどのように鑑賞し、それがドイツ語学習にどのような影響を及ぼしているのかを知るべく、2016年10月末、すなわち後期が始まって約1か月後に受講者15名に対してアンケート調査を行った。15名のうち13名は前期からこのプロジェクトを実施している授業を受講していたが、2名は後期からの受講者であった。アンケートでは以下の項目について質問した。

- ① これまでに鑑賞したDVDの本数
- ② DVDを鑑賞する場所
- ③ DVDを鑑賞する際に使用する機材
- ④ 1本のDVDをどのように鑑賞するか
- ⑤ 借りるDVDを決める際の要因
- ⑥ 聞きとれたフレーズをどのように記入しているか
- ⑦ 知らない単語を耳にした際にどうしているか
- ⑧ 知らない事柄が登場した際にどうしているか
- ⑨ 「映画鑑賞記録」が映画の内容理解に役立っているか
- ⑩ 「映画DVD鑑賞マラソン」のドイツ語学習に対する好影響や効果を感じているか

① これまでに鑑賞したDVDの本数

アンケートではまず2016年4月から10月末までの約7か月間に鑑賞したDVDの本数を尋ねた。前期から継続して受講している学生からは、最少で4本、最多が12本という回答があった。後期からの受講者2名については、1名が1本、1名が2本と回答した。平均値は5.2本であり、貸し出しを休止している夏休みを除き、おおよそ毎月1本を鑑賞していることが分かった。

② 鑑賞の場所

「DVDをどこで鑑賞するか」という問いに対しては12名が自宅、3名が大学と回答した(図1)。

③ 鑑賞する際に使用する機材

次に、どこで、どのような機材を使用して鑑賞しているかを尋ねた。11名がパソコンを使用し、4名がDVDプレーヤーを使用していると回答した(図2)。

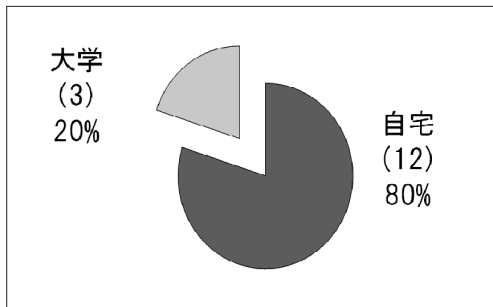


図1：どこでDVDを鑑賞しているか
(カッコ内は実数)

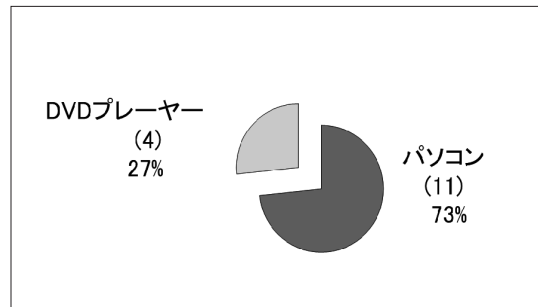


図2：どのような機材で鑑賞しているか
(カッコ内は実数)

④ 1本のDVDをどのように鑑賞するか

「1本のDVDをどのように鑑賞しているか」という問いに対しては、13名が「最初から最後まで1回で鑑賞する」と回答し、2名が「数回に分けて鑑賞する」と回答した(図3)。分ける回数については、1名が2回、1名が2~3回と回答した。

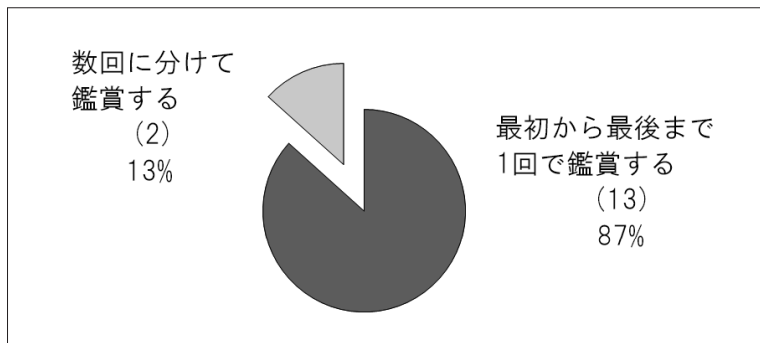


図3：鑑賞のスタイル (カッコ内は実数)

⑤ 借りるDVDを決定する際の要因

現在54本のDVD(付録2)を開架しているが、どのような理由で借りるDVDを決めているのかについて選択肢を与え、複数回答を可能として尋ねた(図4)。最も多かった回答は、DVDが納められている「ケースの裏面にある映画の説明」である。次に多かったのは「映画のタイトル」であるが、これは原題ではなく邦題を指す。多くはないものの、「クラスメートの感想」と回答した者もあり、受講者間で鑑賞したDVDについて話す機会があることがうかがえる。

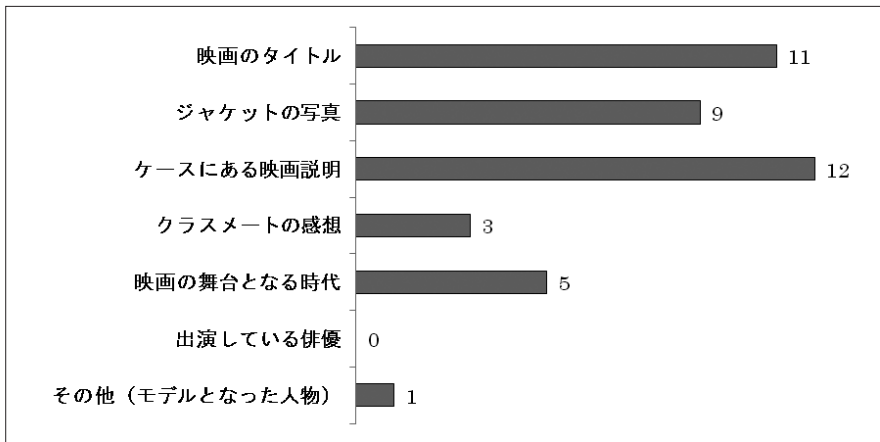


図4：借りるDVDを選択する際の要因（複数回答可）

⑥ 聞きとれたフレーズをどのように記入しているか

映画の鑑賞記録には「映画の中で聞き取れたフレーズ」を記入する欄があるが、どのように記入しているかを尋ねたところ、「DVDを一時停止させて記入する」、「停止させずにその都度記録する」という回答が同数であった（図5）。これらの回答からは、鑑賞の際には記録用紙を手元に置いていることがうかがえる。また、「その他」と回答した者は「メモをしておき、記入する時には綴りや文法を確認してから記入する」、「聞きとれたと思う時間をメモして見終わった後で記入している」と回答しており、鑑賞後に正しく聞きとれたのかどうかを確認した上で記入していることがわかる。

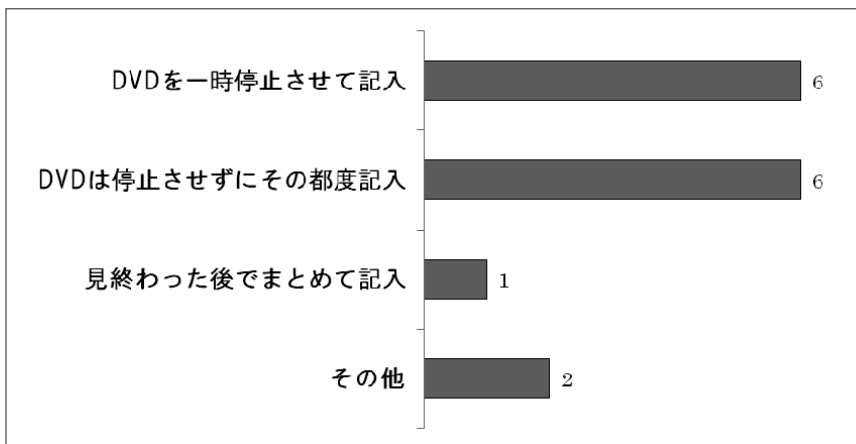


図5：聞きとれたフレーズをどのように記録しているか

⑦ 知らない単語を耳にした際にどうしているか

知らない単語を耳にした場合にどうするかを、選択肢を与えて尋ねたところ、半数は「特に何もしない」と回答しているが、半数は「その場で辞書を引いて確認」や「メモをしておき後で辞

書を引く」と回答している(図6)。「その他」と回答した2名は、それぞれ「字幕を見て推測する」、「他の映画でも複数回出てきた単語や、授業でも出てきたが意味をきちんと理解していないものが出てきたら調べる」と記述している。

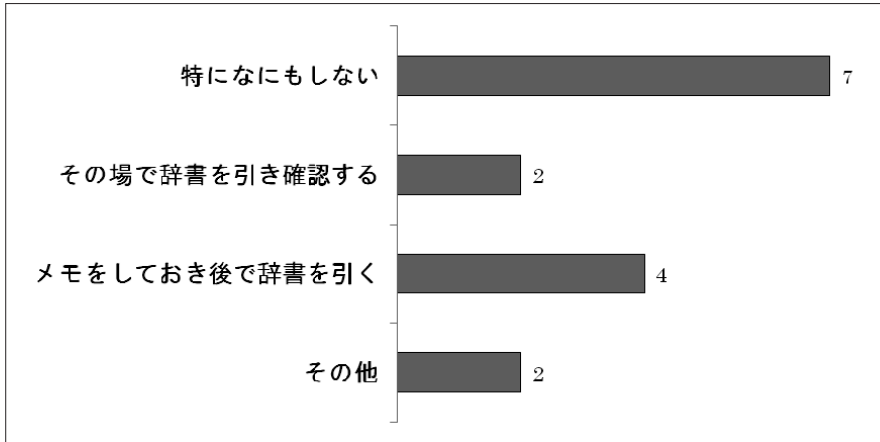


図6：知らない単語を耳にした場合にするか

⑧ 知らない事柄が登場した際にどうしているか

映画の中に自分の知らない事柄(史実や習慣など)が登場した場合にどうするかについても尋ねた。ここでは4つの選択肢を複数回答可で与えた。6名は「特になにもしない」と回答したが、残りの9名については、インターネットや図書で検索したり、クラスメートや友達に尋ねたりしている。また1名が「ドイツの友人に尋ねる」と回答した(図7)。

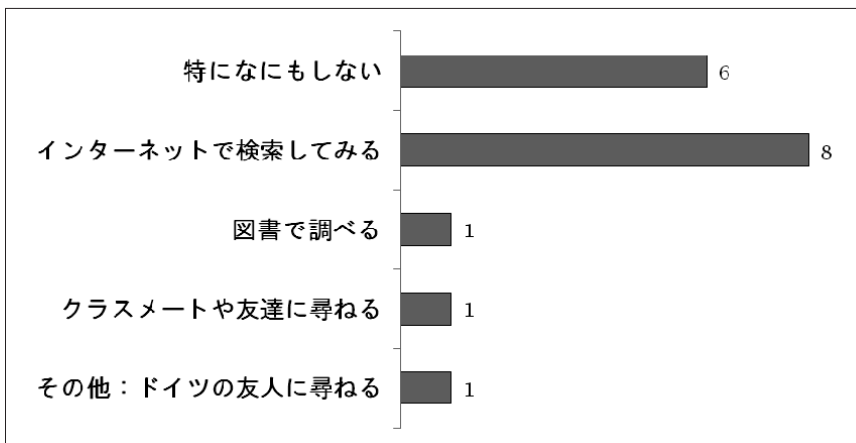


図7：知らない事柄が登場した場合にするか

⑨ 「映画鑑賞記録」が映画の理解に役立っているか

映画の鑑賞記録が、映画の内容を理解することに役立っているかを尋ねたところ、12名が「そう思う」と回答し、3名が「どちらでもない」と回答した（図8）。

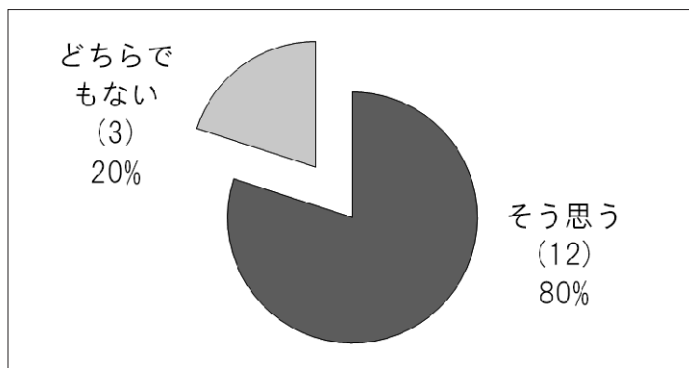


図8：映画の鑑賞記録は映画の内容理解に役立っているか
(カッコ内は実数)

「そう思う」と回答した理由としては以下のような記述があった。

- ・ 鑑賞記録を書くために、きちんと映画を見ようと思うから
- ・ 書くことで自分の頭で話を整理することができるから
- ・ 感想を書くことで、自分の中で感じたことを再確認できるから
- ・ 内容をまとめることで筋が整理されるため。また感想を言語化することで、どんなところに重点を置いて鑑賞したかはっきりするため
- ・ 自分が見たものを自分の中で整理して記憶することができるため
- ・ 提出がなければ日本語字幕を追うだけになりそうだから
- ・ ドイツ語の聞き取りを丁寧にしようと思いがけ、ひとつも逃さず見ようとするところから
- ・ 単語を聞き取ろうと意識して鑑賞するようになるから

「どちらでもない」と回答した理由には次のような記述が見られた。

- ・ セリフを聞き取るという点でリスニングやディクテーションの訓練になっているとは思いますが、「内容を理解する」といった点ではあまりその有無を感じません
- ・ あらすじの要約力はつくと思うが、それと感想だけだと「内容の理解」までには至らないと思う
- ・ 聞き取れたセリフを書くところは役に立っているのかなと思います。

⑩ 「映画 DVD 鑑賞マラソン」のドイツ語学習に対する好影響や効果を感じているか

最後にこの映画鑑賞マラソンのドイツ語学習に対する好影響や効果を感じているかどうかを尋ねたところ、3分の2は「感じている」と回答し、3分の1が「どちらでもない」と回答した（図9）。

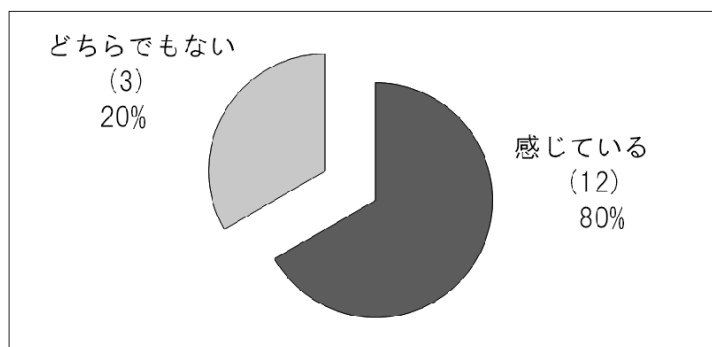


図9：映画鑑賞マラソンのドイツ語学習への好影響や効果を感じるか

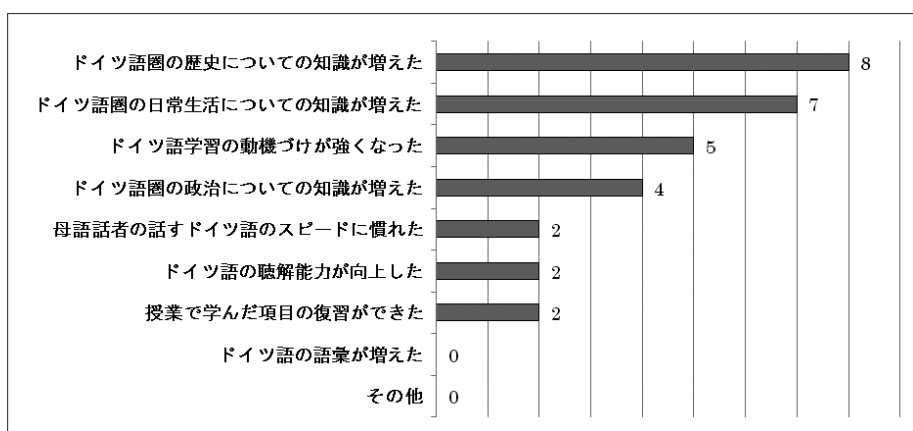


図10：好影響や効果を感じる理由

また、「感じている」と回答した人には、どのような理由で好影響を感じているのかを選択肢（複数回答可）から選んでもらった（図10）。最も多かった回答は「ドイツ語圏の歴史についての知識が増えた」であり、次いで「ドイツ語圏の日常生活についての知識が増えた」という回答が多かった。「ドイツ語学習への動機づけが強くなった」という回答も5名からあり、受講者全体で見れば3分の1がそのような感じているという結果になった。

4. まとめと今後の課題

映画鑑賞マラソンを導入することにより、学習者が授業外でドイツ語に触れる機会を少なからず確保することができた。今回のアンケート調査は簡易的なものであり、回答者の数も少ないため、その結果からは映画鑑賞マラソンのドイツ語学習に対する直接的な効果を測ることはできない。しかし、アンケートの結果からは、映画鑑賞がドイツ語圏の歴史や政治、日常生活について知識を得る機会として機能していることが分かった。また、「映画鑑賞記録」に聞き取れたセリフを記録させることは、語彙を増やすことにはつながっていないが、少なくとも母語話者の話すスピードに慣れる、あるいはすでに学習した項目を再認識させる効果があることが分かった。大学の英語授業や留学生に対する日本語授業など、ある程度の語学力を前提にすることができる場

合には、映画は聞き取りや語彙・表現を増やすための教材として、あるいはディスカッションのきっかけとして導入することも可能である。しかし、初修外国語としてのドイツ語においては、言語学習そのものではなく、ドイツ語圏の日常生活や政治・歴史に関する知識を得るというメリットのほうが大きい。ただ、だからと言って映画を単なる情報源として矮小化してはならない。また、映画を授業に導入する場合、肝要なのは映画を「見せっぱなしにしない」ということである。映画はあくまでも「映画」であり、史実に基づいた映画であったとしても、フィクションの部分が含まれる。したがって、フィクションを「史実」や「事実」と誤認しないよう予備知識を与え、映画で見たことを書籍など別のメディアを使って検証させたりディスカッションをさせたりするなど、鑑賞前後の作業を取り入れることも必要である。加えて、どのような映画を、どのようなスタイルで、どのような観点から鑑賞させるのかということは、学習者の言語能力や興味、あるいは授業の目的に応じて考えられなければならない。

今後も、映画を有効に取り入れたカリキュラムや授業の目的に適った鑑賞方法について、実践を通じて考えて行きたい。

参考文献

- 浅野ひとみ (1999). 「スペイン語教育における映画の視覚教材としての導入」, 『明治学院大学外国語教育研究所紀要』 第 9 号, 105-120. 明治学院大学
- 吉村裕美子 (2010). 「映画を用いた日本語教育」, 『北海道言語文化研究』 第 8 卷, 3-12. 室蘭工業大学
- Müller, I. (2012). *Filmbildung in der Schule*. kopaed.
- Schmidt, D. H. (2015). Möglichkeiten des Einsatzes von filmischem Material: Filmvergleich im Unterricht. In: Welke, T. & Faistauer, R. (Hrsg.) *Film im DaF/DaZ-Unterricht*. Praesens Verlag.
- Straßner, V. (2013). Filmeinsatz im Politikunterricht: didaktische und methodische Überlegungen im Politikunterricht. In: Straßner V. (Hrsg.) *Filme im Politikunterricht*. WOCHENSCHAU Verlag.
- van Hoorn, M. (2015). Stiefkind Film. Zur Problematik der Arbeit mit Filmen im Bereich Deutsch als Fremdsprache. In: Welke, T. & Faistauer, R. (Hrsg.) *Film im DaF/DaZ-Unterricht*. Praesens Verlag

《付録2：所蔵 DVD リスト》

タイトル	製作年	タイトル	製作年
ヒトラー暗殺、13分の誤算	2015	4分間のピアニスト	2006
顔のないヒトラーたち	2014	白バラの祈り	2005
東ベルリンから来た女	2012	ドラゴンの秘宝	2005
コーヒーをめぐる冒険	2012	ヒトラーの追跡	2005
ルートヴィヒ	2012	エリート養成機関ナポラ	2004
ハンナ・アーレント	2012	アグネスと彼の兄弟	2004
パチカンで逢いましょう	2012	ヒトラー～最後の12日間～	2004
おじいちゃんの里帰り	2011	ベルリン僕らの革命	2004
マーラー 君に捧げるアダージョ	2010	ベルンの奇蹟	2003
ミケランジェロの暗号	2010	ローゼンシュトラッセ	2003
ゲーテの恋	2010	GOOD BYE LENIN!	2003
白いリボン	2009	マーサの幸せレシピ	2001
ヒマラヤ 運命の山	2009	プリンセス アンド ウォリアー	2000
ソウルキッチン	2009	MON-ZEN (もんぜん)	1999
ベルリン陥落 1945	2008	ラン・ローラ・ラン	1998
シップ・オブ・ノーリターン	2008	Am I Beautiful?	1998
ビハインド・ザ・ウォール	2008	ノッキン・オン・ヘブンズ・ドア	1997
クララ・シューマン 愛の協奏曲	2008	ビヨンド・サイレンス	1996
ヒトラーの贖札	2007	愛され作戦	1994
そして、私たちは愛に帰る	2007	ふたりのロッチェ	1993
わが教え子、ヒトラー	2007	時の翼にのって	1993
素粒子	2006	僕を愛したふたつの国	1990
善き人のためのソナタ	2006	ロザリー・ゴーズ・ショッピング	1989
ドレスデン 運命の日	2006	ベルリン天使の詩	1987
僕のピアノコンチェルト	2006	山の焚火 HOHENFEUER	1985
みえない雲	2006	U・ボート	1981
ヴィーナス 11	2006	赤ずきん	1962

ABSTRACT

Effects of Films in German Lessons

Takako YOSHIMITSU

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

In Japan, the introduction of films into German lessons is not often discussed, because the students usually do not have enough language skills to understand the film without subtitles. However, students can learn a lot from watching subtitled films. For this purpose, it is necessary to consider which films to show, how to show the films, and which accompanying tasks to use.

At Hiroshima University, we are offering a German course for second-year students. In this course, students participate in a project known as the “Film-Viewing-Marathon”. The students have to watch at least one film DVD in German every month and write out film protocols, in which the title of the film in German and Japanese, the protagonists, the plot of the film, etc., are recorded.

A survey was conducted with the intention of gaining insights into the learning effects of films. A questionnaire was administered to 15 students, who participated in the Film-Viewing-Marathon in 2016. The results of this survey show that watching films gives students a valuable opportunity to gain knowledge about topics such as German history, politics, and daily life, and that it motivates them to learn.